

「珈琲ダイアリー 会社員と宇宙人」

海山純平

・登場キャラ

風見仁（30）・珈琲移動販売をしながら「夢

探し」の旅をしている。

手塚恭一（40）・会社員。ある願いと使命感

を抱いている。

トニー（？）・自称「宇宙人」の少女。

風見「はい、ブレンドコーヒーお待ち。熱いのでお気をつけて。次のお客さん、どうぞ」

SE 昼のオフィス街

風見（M）「俺は風見仁。珈琲を提供しながらキッチンカーで全国を旅している。今はとあるオフィス街で商売中だ。今日はお客さんが多く、売り上げは上々だ」

風見「はい、お待ちどう。次のお客さん、どうぞ」

恭一「あの、ここはどんな珈琲を販売しているのですか？」

風見（M）「くたびれた背広。まあオフィス街だから別段珍しくないけど……冴えない感じのおっさんだな。まいいや」

風見「色々ありますよ。こちらメニューです」

恭一「へえ、こんなに……それじゃあ、宇宙人と遭遇しやすくなる珈琲を」

風見（M）「おっと、難易度の高い注文がはいったぜ」

M

風見「えくと、何から質問したらいいのか。とりあえず、ウチは普通の珈琲しかありませんので」

恭一「では、ブレンドを」

風見「少々お待ち下さい」

S E お湯を沸かす

風見「遭遇しやすくて、会ってどうするんです？えっと」

恭一「あ、私、手塚恭一と申します。ここの近くの会社に勤務しています」

風見「風見仁です。で、なぜ会いたいのですか？」

恭一「宇宙人を倒してみたいからです」

風見（M）「物騒だな、おい。光の国の戦士もここまで好戦的じゃない筈だ」

風見「どうして倒したいんです？」

恭一「派手な思い出を作りたいんですよ」

風見「派手な思い出？」

恭一「はい。もう20年近く会社員をしていて、ふと思ったのです。自分はただの歯車なんじゃないか、と」

風見「歯車、ですか」

恭一「同じような日々をただただ過ごす。いつもの時間にいつもの動きを繰り返す。そして成長どころか、変化もしない。これって歯車と似ていませんか？」

風見「まあ、常に変形する歯車なんて見た事

無いですね」

恭一「そんな自分に虚しさを感じまして。「俺はこんな味気ない人生を送る為に生まれたのか？」と、よく問うようになりまして」

風見（M）「つまりは刺激が欲しい、と。おっと、珈琲にお湯を淹れる頃合いか」

恭一「ですから、ここらで一度でもいいから、派手な思い出を作りたいな、と」

SE フィルターにお湯を注ぐ

風見（M）「ゆっくりと「の」の字を描くようにお湯を注いで」

恭一「それで思い付いたんです。「そうだ、宇宙人を倒そう！」と」

風見「「そうだ、京都へ行こう！」みたいに言わないで下さいよ！？そもそも何で宇宙人

が標的に？」

風見（M）「あつぶねえ！お湯こぼすところだったわあ。てか、思い出作りの為に倒される宇宙人も災難だな」

恭一「あれ？知らないんですか？この街の噂」

風見「ここに来たの二日前なので、噂とかまだ何も」

恭一「最近この街は、UFOがよく目撃されるんですよ。昼夜問わず、結構な頻度で」

風見（M）「UFOねえ。どおりでカメラを構えた人が、あちこちに居るわけだ」

風見「一応聞きますが、ドローンとかの間違いいでは？」

恭一「（スマホを見）少し前にはっきりと撮れた動画が…あった。ほらこれ」

風見「うお、本当だ。ドローンには見えない

し、ラジコンにしてはデカイし、CGにも  
見えないな」

恭一「このUFOがよく現れるんですよ」

風見「ほう。で、なぜ倒したいんです？とい  
うか、倒す手段ありますか？」

恭一「ただ出会うだけじゃつまらないので。

あと、ローキックは昔から自信がありま  
す！」

風見「まさかの肉弾戦？！格闘技経験者だっ  
たんですか？」

恭一「いえ。トニー・ジャー作品の影響を受  
けて、ローキックの真似だけが続けていま  
した。実践など全然」

風見「つまりほぼ素人、と？」

恭一「はい」

トニー「ナメとんのかあああ！！」

恭一「だああ！！？何、君？」

風見「どこから：てか本当どちらさん？！」

恭一「お子さんじゃないんですか！？」

風見「知らない子ですねぇ！」



風見（M）「育児放棄の発言ではなく、本当に知らない少女が俺の後ろから現れた。いつ車に乗り込んだんだ？」

トニー「思い上がりも大概にせい！」

風見（M）「小学低学年くらいの背丈。赤いシヤツにオーバーオールという、とあるゲムキャラみたいな服装。そして特徴的な銀髪と色白の肌が、どこか神秘性を帯びていて目を惹く」

トニー「よし、ワテが相手してやる。掛かって来い」

恭一「え、僕と君が戦うってこと?!」

風見「おいおい急に出て来て何言ってるんだ…：  
えっと」

トニー「名前か？そうだな…（恭一に）さつき名前みたいなのを言ってなかったか？ロ

「キック辺りで」

恭一「トニー・ジャーのこと？」

トニー「そう！ワテの名はトニーだ！」

風見「絶対今考えただろ。で、戦いごっこを  
したいって？」

トニー「ごっこではない！マジのバトルだ！  
この中年に現実の厳しさを教えてやる」

恭一「マジでって…絵的になあ」

風見「何で戦いたいんだい？トニーちゃん」  
トニー「ワテが宇宙人だからだ！素人のロー  
キックで倒せるほど、宇宙人はひ弱でない  
と証明してやる」

風見「君の情報量がもう渋滞してきたぞく」  
トニー「喜べ中年！宇宙人と戦えるぞ！つい  
でに倒されるぞ！」

恭一「だから絵的に問題が…」  
トニー「なんだビビッてんのか？」

風見「まともな地球人から見れば、中年が子  
供を虐めているように見えるのですよ、ト  
ニーちゃん」

風見（M）「あれ？平日の昼間のオフィス街に  
何で居るんだ、この子。学校はどうした？」

トニー「仕方ない。おい、風見だっけ？お前  
が代わりに相手してやれ」

風見「とぼっちりにも程があるだろ！？え今  
から？」

トニー「イエス！さっさと始めてさっさと終  
わらせろよ」

風見「どうします、恭一さん」

恭一「2、3分やって終わりにしましょう。

昼休憩もそんなに長くないですし」

トニー「店員と会社員のストリートファイト  
と間違えられないようになく」

風見「お前が言うなよ！」

M

トニー「レディー、ファイ！」

恭一「(蹴る)せあ！」

風見「防いでからのカウンター！」

S E 打撃音

恭一「ぐっ！！やりますね…でもまだまだ！」

S E 打撃音

恭一「げはっ！！おえ…！」

風見「あの、やっておいて何ですが、大丈夫ですか？」

恭一「お気になさらず。せいっ！」

風見(M)「こんな調子で恭一さんは、3分間カウンターを喰らいまくったのであった」

S E 膝をつく

恭一「うご、おお、おおお…」

トニー「そこまで！ Weiner 風見！」

恭一「(咽る)」

風見「本当に大丈夫ですか！？」

恭一「どうして：そんなに：楽々と」

風見「来るのがローキックだけと分かっ

たので、動きが読みやすかった、としか：」

トニー「そんな実力で挑む気だったのか？ 予行演習しておいて良かったなあ」

恭一「浮かれていました。はい」

トニー「よし！ 1週間やろう。その間に鍛えまくれ！」

恭一「1週間後に何があるんだい？」

トニー「ワテが仲間を：宇宙人を連れて来てやる。そこで戦わせてやる。サービスとして肉弾戦だ」

風見「何言ってるのこの子？」

トニー「楽しみにして：いやそんなにしてないな。まいいや、とにかく特訓しろよ」

SE 突然の強風

恭一「うわっ！びっくりした。かなり強い風でしたね……て、あれ？！」

風見「居なくなってる！？今の一瞬で何処に」

恭一「不思議な子でしたね。不思議というか何というか……」

風見「ところで、1週間後に宇宙人連れて来るって言っていましたよ。どうします？」

恭一「折角の機会ですから、特訓するしかありません！」

風見「え？疑ったりしないで信じちゃいますか？」

恭一「とはいえ今の僕では、勝てる確率はゼロです。風見さん、お願いがあります」

風見「嫌な予感がしますが何でしょう？」

恭一「どうかトレーニングコーチとして、1週間僕を鍛えて下さい！」

風見「やっぱりそうきたあ！」

恭一「お願いです！営業後に少しだけでいいので、どうか！どうか！」

風見「(溜息) ああもう、わかりました。できる限りのことはします」

恭一「本当ですか!? ありがとうございませす! いや、こんなにあっさりオーケーして下さるとは思いませんでした」

風見「(小声) 断ったら土下座してきそうだからだよ」

風見(M)「かくして俺は、期間限定のコーチに任命されたのだった。そしてトレーニングは翌日から始まった」

M

SE 木々のさざめき

風見「へえ、近くにこんな広場が」

恭一「木々に覆われて周りからは見え辛いで、夜でも練習には持ってこいかと」

風見「確かに。にしても、これから練習するのに背広とはねえ。まいいですけど」

恭一「ははは……」

風見「うし！それじゃ今日は、前後左右のステップの練習から！始め！」

SE 靴が地面を擦れる

恭一「よいしょ、おっと、ほっ、よっと」

風見「もっと小さく細かく早く！」

恭一「はい！」

SE ステップが早くなる

風見（M）「覚束ないなあ。本当は体力作りからやりたいけど、練習期間が短い。こりや練習メニューを厳選しなきゃだな」

SE キュツとグローブをはめる

風見「今日はボディー……つまり腹を殴ります。こっちも多少は加減しますが、ちゃんと腹



筋に力を入れて下さい」

恭一「もろに受けるんですか？」

風見「攻撃をくらわないのが一番の理想ですが、そんなテクありますか？」

恭一「…いいえ、まったく」

風見「ですので、少しくらいは打たれ慣れて下さい。いきますよ！」

風見（M）「これが30秒前のやり取り。そして現在は」

恭一「うぼおえええ！！えっほ！えほ！」

風見「めっちゃ加減してもこれかあ…。あの、

大丈夫ですか？立てますか？」

恭一「大丈夫、です。もっとやり…おええっ！」

風見「ヤバイですね！？今日はここまでにしまししょう！」

恭一「いいえ、続けて下さい！お願いします！」

風見「無理しない方がいいですよ。思い出作りの為に体壊しちゃ、笑えないですって」

恭一「気合で乗り越えます！ですから！」

風見「あのトニーって子も、さすがに命までは取らないと思いますよ？危ないと感じたら直ぐに降参して」

恭一「したくないです！負けたくないです！」

風見「どうして、そこまで……」

恭一「これ以上自分に……何も無いと思ったくないんです！」

風見「何もって……」

恭一「人生に虚しさを感じるって話をしましたよね？」

風見「ええ、はい」

恭一「僕の周りの人達は皆、すごいんです。ちゃんと夢を持って追い続けて、そして叶えたんです。途中で何度もくじけそうになりながらも、それでも」

S E 風で木々がざわめく

恭一「それと比べて僕は、何も無い人生を過

「ごしています。取り柄も夢も無い人生を」

風見「「平穏な日々を過ごしている」とは思えないのですか？」

恭一「思えなくなりました……もう。夜に布団に入る度に、劣等感の波が押し寄せて来るんです」

風見「最近、眠れてますか？」

恭一「菓を飲んでどうにか」

風見「「宇宙人を倒した」なんて思い出を作れた所で、気持ちが悪くなりますか？」

恭一「……正直、わかりません。宇宙人の方々には……申し訳ありませんが」

風見「そう、ですか」

恭一「げんなりしましたか？ しますよね？ はっ」

風見「……恭一さん、休憩がてらお遣いを頼んでもいいですか？」

恭一「え、お遣いですか？」

風見「実はお腹が空いてまして。夜食がまだなんです。コンビニでもいいので、おにぎ

りを四つ買ってきてくれませんか？具はお任せします。はい、お金」

S E 小銭を渡す

恭一「(呆け気味に) はい：わかりました。では、行ってきます」

S E 遠ざかる足音

風見「(溜息) やれやれ」

トニー「やれやれだな」

風見「唐突に現れたな、問題児！子供が一人で出歩く時間じゃないぜ？」

トニー「ふふふ。こんな姿だがお前の数倍は生きているぞ。地球人よりは長命なのだ」

風見「そのキャラ設定まだ続いたのか」

トニー「キャラちゃうわ！それにしてもあの中年、精神的な悩みを抱えているようだな」

風見「ああ。どうしたものか」

トニー「気になったのだが、何故お前はあの  
中年の悩み解決に勤しむんだ？断ればよか  
っただろ？どう考えてもお前に利益はあま  
り無いぞ。それとも、地球人というのは皆、  
お前みたいなお人好しばかりなのか？」

風見「今回は特別だよ。俺の個人的な事情が  
絡んでてな」

トニー「ほう。事情か」

風見「……なあ、一週間後の対戦相手ってど  
んな奴だ？」

トニー「そんな手の内を明かす程ワテはお人  
好しじゃない」

風見「そうかい。じゃあ、さっさと家に帰り  
な。なんなら送るぞ？」

トニー「家だと？ワテの星、地球から結構距  
離あるぞ？」

風見「ああもう、キャラに拘るなあ！んじゃ、  
地球に何しに来たんですか、宇宙人トニー  
ちゃん」

トニー「調査しに来たんだ。どんな自然環境、

生物、資源、文明が存在するのかな。ま、この星を発見したのは最近なので、これから何を深掘りしていくかはまだ決まっとらんけど」

風見「調査ねえ。面白いモノはあったかい？」

トニー「あったぞ。ワテらをローキックで倒そうとかいう中年の知的生命体が居た」

風見「そいつはよかった。実は俺も少し面白いと思ってる」

トニー「そいつに付き添ってる地球人も気になるがな。行動目的がわからん。なあ、どうしてだ？お前の事情とはなんだ？」

風見「話を蒸し返してきたよ…まいつか。俺はな旅をしてるんだ。「夢探し」の旅だ」

トニー「「夢探し」？」

風見「俺は昔からこれといって、何かに熱くなるほど夢中になったもの、夢が無いんだ。だから旅をして、色んな出来事や人に遇って夢と思えるものを見付けたいんだ」

トニー「あの中年に手を貸して、夢は見付け

られそうか？」

風見「わからない。もしかしたら見付からな  
いで終わるかもしれない。でも、それでい  
いと思う」

トニー「無駄に終わるかもしれないのか？」

風見「無駄にはならない。どんな出来事であ  
れ、それが経験となって人を形作っていく  
んだよ。つまり、夢を見付けるきっかけに  
なるかもしれないんだ」

トニー「夢探しとやらは随分と時間が掛かり  
そうだな」

風見「さてと、そろそろ本当に家に帰った方  
がいいんじゃないか？」

トニー「ふむ、そうだな。今日はここまでに  
しておくか」

S E 突然強風が吹く

風見「っ！また急に強い風が吹いたな。トニ  
ーちゃん：てあれ、居ない！？」

S E 地面を擦る音 小走りの様だ

恭一「(荒い息)すみません遅くなって……どうかしました？」

風見「いや別に……ん？」

S E UFOが空を飛行する

風見「うお！？ UFOだ！この前見せてもらった動画のと同じ！……すげえ」

恭一「まさか、僕達の練習風景を観察しているんじゃない？」

風見「そんなまさか」

恭一「ついでに、インスタにアップしてS N

Sでバズらせてるんじゃない！」

風見「尚更まさか！？宇宙人インスタやってるの？！」

恭一「そうだったら夢があるじゃないですか」

風見「ツツコミどころしかありませんて！」



風見（M）「唐突に現れたUFO。：：トニー  
ちゃんはあれに乗っているのかねえ、なん  
て想像をしてみた：：いやまさかな！なん  
て出来事がありながらも時は流れていった」

M

恭一「とうとう明後日：：ですね：：よろしくお  
願います」

風見「ええ：：あの、恭一さん、大丈夫です？  
顔色悪いですけど：：疲れが溜まってませ  
ん？」

風見（M）「考えてみれば無理もない。素人が  
仕事終わりに連日、格闘技の真似事を始め  
たんだ。気合いがあろうと体が悲鳴を上げ  
るか」

風見「今日は休みましょう。休むのも修業の

一つですから」

恭一「そんな！？もう時間は短いんですから、休んでなんて」

風見「気持ちちは分かりますが、本番当日に疲労で戦えなかったら意味ないですよ。ここは勇気を出してがつつり休んで下さい」

恭一「大丈夫ですから……」

風見（M）「参ったなあ。こういうタイプは無理したがるから、手に負えない。……仕方ない、ハードルを下げるか」

風見「じゃあ今日はステップの練習で妥協して下さい。あそこに一際でかい木があるでしょ？前後にステップしながら往復する。いいですね？」

恭一「……わかりました」

SE ステップしながら遠のいていく

風見「足取りが重い。満身創痍で本番なんて迎えたくないっての。こうなると明日はとうすりやいいんだ？」

SE 地面を擦る音

恭一「はあ、はあ、はあ……も、戻って……来ました」

風見「ご苦労様。じゃあ、今日の練習はこれで終わり。今夜は休む事に専念して下さい」

恭一「やはりそうなりますか……」

風見「あったかいご飯食べて、風呂に入って、布団にダイブして下さい。奥さんだって旦那さんがこんな状態じゃ、心配するでしょ？」

恭一「え？」

風見「へ？」

恭一「……ああそうか、言ってますでしたね。妻は、数年前に他界してます」

風見「え、へ？でも左手の薬指に指輪が……」

恭一「癖みたいなものですよ。…こんな僕には勿体ないぐらい、出来た女でしたよ。(息)  
事故…車って怖いですね」

SE 遠くでクラクションの音

風見「…：知らなかったとはいえ、すみませ  
ん」

恭一「いえ、気にしないで下さい」

風見「…：ホットミルク、飲みますか？それ  
とも、珈琲にしますか？」

恭一「珈琲で」

M

恭一「(珈琲飲む) ああ、おいし。酸味があり  
ますが、柔らかく甘い？なんて言う珈琲で  
すか？」

風見「コストリカです。ミルクとの相性もい  
いので、いつでもお声掛けを。それと…さ

つきはすみません」

恭一「気にしないで下さい。時間が経ったおかげで、大分慣れましたから」

風見「…素敵な奥さんだったんですよ？」

恭一「ええ。こんな僕なのに、連れ添って来て。あまり思い出作りをしてやれなかったのは、申し訳ないです。ある時、聞いたんですよ。『僕とどうして結婚したんだ？』という男なんざそこら中に沢山いるだろ！」つて」

風見「それ、酔ってる時に聞いたでしょ？」

恭一「はは、当たり前です！で、返って来た答えが「あんたみたいな味気ない男でも、何か凄い事をやり遂げる時が来る。それまで首を長くして待つとしよう」ですよ」

風見「ははは！冒険心が強すぎませんか、奥さん！？」

恭一「しかし結局、そんなお楽しみも僕は…」

風見「それがなぜ今になって「宇宙人をロー

キックで倒す」なんて目標を？」

恭一「確かに妻はもうこの世に居ません。ですが「お前の目に狂いはなかった。お前が選んだ男は、期待を裏切らない男だった。それを証明してやる」という気になりました。てね。まあ、僕が自己満足したいだけですけど」

風見「恭一さん、今日はやはりこれで終わりにします」

恭一「……わかりました」

風見「その代わり、宿題を出します」

恭一「宿題、ですか？」

風見（M）「正直、ただのローキックだけでかっつのは難しい。ならばどうするか？……バリエーションを増やせばいい。なんて事をしている内に、とうとう対決の日となった」

風見「お。今日もUFOが飛んでる」

S E U F O 飛行音

トニー「よくバックレずに来たな！その勇氣は褒めよう！」

風見「（小声）今、何時ですか？」

恭一「（小声）20時です。子供が一人で出歩く時間じゃないですね」

風見「（小声）終わったら自宅まで送らないとですねえ」

トニー「おい、聞こえてるぞ！送迎など必要ない！一瞬で帰れるからな」

恭一「耳良すぎませんか、あの子?!」

風見「特徴的な見た目、耳の良さ、一瞬で現れたり消えたり…もう人間離れしまくってるなあ」

恭一「本当に宇宙人なのでは？」

風見「いやくまさか」

トニー「宇宙人だっつうの！さて、もう始め

るが準備はいいな？」

風見「準備はいいですね、恭一さん。て、なんか顔色悪くないですか？」

恭一「……大丈夫です。問題ありません」

風見「そう……ですか。(トニーに)こっちはオ  
ーケーだ。そろそろ対戦相手を出してもら  
おうか」

トニー「いいだろう。出でよ、我が同朋よ！」

SE 空から何かが振ってきて着地

ギチギチと関節が軋む音

風見「は？……あれって、人体模型……ですよ  
ね？正解だろうけど」

恭一「ええ……」

トニー「ふははは！どうだ驚いたか！」

風見「驚くわ！小学校以来だよ人体模型なん  
か見るの！」

トニー「これが対戦相手だ、中年。覚悟はい  
いか？」



恭一「……望むところです」

M

トニー「では、始めるぞ。レディー……ファイ！」

SE 軋む音を出しながらも動く模型

腕、脚を振り回し攻撃

風見「すごい。今時の人体模型って動く機能なんてあるんだな」

トニー「違わい！ワテが超能力で操作してるんだ！」

風見「あくはいはい。そういう設定ね。で、あの人体模型、どこからパクッて来たんだ？ちゃんと返すんだぞ？通報はしないでおくから」

トニー「設定言うな！普通に使える能力だ！それと、言われなくても用が済んだら返すわい」

S E 脚が地面を擦る。打撃音

恭一「くっ！せや！！」

トニー「素人の割に頑張るなあ、あの中年。

防御まで心得てるし。というか、本当にロ

ーキックしかやらんのか！？」

風見「一応、叩き込める限りの事はしたから

な……しかしやっぱ変だな。動きが少し鈍

い。顔色も更に悪くなってるし」

トニー「気付いてないのか？あの中年、内臓

を患ってるぞ。地球人と言うと腹膜炎だっ

たか？」

風見「まじかよ！なんでわかんのか？」

トニー「地球人とは眼の出来が違うんだ」

風見「恭一さん、自分の病気わかってるのか？

ただの腹痛だと思っていたらマズい。早く

降参でもいいから止めさせねえと」

トニー「中年がそれで納得するなら、やれば

いい。痛みを耐えてまで何故戦うのか知ら

んけど」

風見「戦う理由は……ああもう、思い出したら止めにくなかった！」

トニー「だからと言って、難易度は下げないぞ。いくらワテらでも、舐めた相手に優しくする程お人好しじゃないぞ」

風見「ちいっ！」

SE 打撃、すり足

恭一「はあ、はあ、はあ……っ！！腹が。でも、それぐらいなんだあ！」

トニー「おお。しんどそうなのに頑張るじゃないか」

風見「足裁き、音からしての威力、フォーム。痛みに耐えながらとは思えないな。こりや予想以上だ」

トニー「だが、いつまで保つだろうな」

風見「あの人体模型、体力とかあるのか？さすがに無限のスタミナとか勘弁だぞ？」

トニー「一応統計データを参考に設定はしてある。フェザー級のボクサーと同じくらいだ」

風見「ハードル高いだろ?!」

トニー「ちゃんとダメージが一定量に達したら、停止するようにした」

風見「恭一さん、早めに終わらせてくれ……」

S E 打撃音

恭一「痛つ!今日は一段と酷いな……。ただの腹痛じゃないのかな?おっと!」

S E 模型の空振り音

恭一「危なっ!痛みに気を取られていたら、ダメだ。ここは堪えて集中しないと……ぐ!」

トニー「ありや病気に気付いてないな。医者  
の診察も受けてないだろうさ」

風見「こうなりや、いざって時は恨まれてで

も止めるか」

トニー「むしろ今止めた方がいいんじゃないか？ほれ」

SE 鈍い打撃音

恭一「うぐうう！」

風見「フェイントでボディーに！？やり過ぎ

だ！死んじまうだろ」

トニー「言っただろ、舐めた相手に優しくしない、と。死んだらそういう生命体だったと報告するまでだ」

風見「テメ…！！」

恭一「だああああ！」

トニー「お、まだやるか。意外と粘るな」

恭一「僕は、これ以上負ける思いは…！それと、証明するんだ！お前の目に狂いはなかったと！」

トニー「どういう意味だ、あれ？」

風見「二重の意味で負けられないって事だ。

恭一さん！宿題はしっかりやりましたか！

トニー「はあ？」

恭一「はい！ちよつと徹夜しましたが、しっかり！」

風見「それじゃ見せてもらいましょうか！」

恭一「わかりました！」

トニー「おい、何が始まるんだ？」

風見「見ればわかるさ」

恭一「せあああああ！」

SE 連続で打撃音

トニー「な！ローキックの連続蹴りだと！？」

風見「一箇所に集中的に攻めるかあ。効きそうだなあ」

恭一「うううりやっ！」

トニー「今度はかなり助走つけてからのキック！？同じローでも威力があるぞ！」

風見「へえ。あんなのもあったんだ」

トニー「おい、さっきから初めて見るような

言い方するな？」

風見「だって初めて見たんで。というか、どんな攻撃をするのかも知らなかったんで」

トニー「はあああ！？なんじゃそりや！どんな宿題をやらせたんだ？」

風見「俺が出した宿題は「トニー・ジャー作品を観て、真似出来そうなのを選んでそれを自主練しろ」てなもんでな。つまり物真似だ」

トニー「お前でさえどんな技を真似るか知らないなんて、賭けじゃないか？」

風見「サプライズに飢えていたんでな。お、上手くいったみたいじゃないか。模型の動きが鈍ってきているぜ？」

SE 軋む音が大きくなる

トニー「ふむ。超能力でも強引に動かすのが難しいか…：人形とはいえダメージが深刻だな」

風見「一気に畳みかける、恭一さん！」

恭一「はあ、はあ、はあ……っ！」

トニー「あっちの方がもっと深刻そうだな。

疲労と病のダブルパンチだから当然か。じ

ゃあ、こっちが畳みかけるか」

風見「恭一さん！一旦距離を取って！早く」

恭一「ぐっ！くうう……」

トニー「ロシアンフックと言ったか？そいつを一発」

風見「今喰らったら冗談抜きでマズい！」

恭一「はあ、はあ……僕は、自分に負けるの

も、期待を裏切るのも……もう」

トニー「じゃあな」

風見「恭一さん！」

恭一「っ！ううあああああ！！」

トニー「ん？！」

S E 二回打撃音

模型、倒れる



トニー「なんだ：今の」

風見「一発目はローの回し蹴りで、模型がバ  
ランス崩して膝付いたところをローキック。

高さ的に顔面だ」

恭一「(荒い呼吸) ぼ、僕、は」

トニー「勝負あり、だな。ちっ」

風見「やった、やった！ やったぜ恭一さん！！

あんたの勝ちだ！！」

恭一「うう……っ」

SE 倒れる

風見「恭一さん！？ (駆け寄る) 恭一さん、

聞こえますか？ しっかりして下さい！」

恭一「やりましたね：自分の願いと、妻の期

待を、裏切らずに：うう」

風見「ヤバイ！ 早く救急車呼ばないと」

トニー「それよりも手っ取り早い方法がある」

SE UFOが来る



び寄せ、恭一さん諸共姿を消した。もう何が起きているのか、状況は分かっても実感が湧かない」

S E 再び強い光

風見「また眩しっ！て、恭一さん、戻って来た！！」

トニー「そいつの病を治したぞ。ワテらの技術に掛れば、この程度の治療、秒で済む。直に目覚めるだろうさ」

風見「(呟くように)これが宇宙人の……」

トニー「さて。調査のついでとはいえ、地球人の戯れに付き合い過ぎたな。ワテは別の調査をするので、お前達とはここでお別れだ」

風見「そう、なんだ」

トニー「そういえばお前、夢探しをしているんだったな。今回の一件で夢は見付かったか？」

風見「いいや。でも、いい思い出にはなつたよ。ありがとな」

トニー「ふん。ではな」

SE UFO去っていく

風見(M)「こんな感じで「ローキックで宇宙人を倒す男」の願いは、ちよつと違う形では叶ったのであつた。無駄な出来事、と言えるかもしれない。だが、それでいいと思つている。旅はそう簡単に終わりを迎えては、旅ではないと俺は思つているので」

M

恭一「そうですか。じゃあ、ここでの営業は今日が最後に」

風見「旅なんでね。いつまでも同じ場所に居るわけにやいかないんですよ」

恭一「あの、僕の我が儘に付き合つて頂き、

ありがとうございますました」

風見「いいですよ。思い出作りも旅の醍醐味  
なんで。お？」

S E U F O 飛行音

風見「今日も飛んでるなあ」

恭一「あれに乗っているんですかね、あの子」

風見「かもしれないですね。今度は一体何を調  
べているやら」

風見（M）「俺の旅は続く。宇宙人が調査しに  
来る程の何かがあるこの星を。夢を探しに  
次の地へ行く」

M

完